愛光NEWS
2024年3月

2024（令和6）年　4月　発行
（編集）愛光本部企画室
（TEL）043－484－6391
（HP）https://www.rc-aikoh.or.jp/

3 月 2 日に、「ボランティア交流会」が、はちす苑の千田ホールで開催されました。コロナ禍では、ボランティアの皆様の受け入れが制限されていました。昨年 5 月より、少しずつボランティアの受け入れを再開し、この日は 36 名の方が集まってくださり、3 年ぶりの交流会が開催されました。久しぶりの再会、仲間とのお弁当、ゲームを通しての交流など、とても有意義な時間となりました。

□事業経過など（2024.3.1～3.31）

1	金	業務執行会議
2	土	ボランティア交流会
4	月	嚥下研修/本部実績会議/本部スタッフ会議
5	火	業務執行会議
6	水	地域食堂委員会/コヒューマントレーニング
7	木	メンティー交流会
8	金	ボランティア委員会/GHPT
11	月	嚥下研修/後援会運営委員会
13	水	広報委員会/コヒューマントレーニング/衛生委員会・感染症対策委員会
14	木	総合防災訓練
15	金	職場改善委員会/第三者委員報告会
16	土	理事会
18	月	嚥下研修/法人墓参り
20	水	地域食堂ともいき（お弁当販売）
21	木	栄養ケア会議/研修委員会
24	日	評議員会
25	月	嚥下研修
26	火	法人コンプライアンス委員会
27	水	障害者支援事業部実績会議/財務 PT/地域福祉事業部実績会議
28	木	高齢者福祉事業部実績会議/はちす苑経営改善 PT

■出来事

□法人創立記念行事　―　はちす苑

3 月 18 日は、愛光が社会福祉法人化されて 69 年目の記念日です。
食事のメニューは利用者の好きな『　マグロのとろろがけ　』。

魚は必須脂肪酸を含む必要なタンパク質でもあり、マグロの N3 系の脂肪酸は体内で作ることができず、食事から摂取しなければならない必須脂肪酸である。魚の煮つけや焼き魚は苦手だが『　マグロは食べられる　』という嗜好の方も多い。

びんちょうトロマグロの筋を取って下処理をして食べやすい大きさに切る。お腹の脂もよく乗っており『　これが N3 系のオメガ 3 なのか～』と、感じながら切っていきました。
利用者の方は身の軟らかいびんちょうトロマグロと長芋を味わわれ、表情には満足感があふれていました。

■月報から

□家族の存在

８２才の女性利用者の弟様が来訪したときのこと。会うのは４，５年ぶりという。弟様が本人のいる居室に入り、横になっている利用者に声をかけた。「〇〇だよ。会いに来たよ。」その利用者は「〇〇くーん！うれしい！」と、普段はそこまで感情を出すことのない方であるが、その時はいつもとは違い、震えた声と目を見開いた表情で喜ぶ感情が溢れていた。その場に立ち会った職員がもらい泣きしてしまうような感動的な場面だった。

職員はご家族に会い説明をしてどんな反応があるのか、数年ぶりの面談に少なからず不安もあったろうと思う。しかし、終わってみると、ご家族の愛情、想いを目の当たりにし、自分がこの仕事をしていることの意味を再認識できたような、背筋を伸ばし、頑張ろうという気持ちになれたのは私だけではないと思う。コロナで空いた数年間を埋めるかのように、利用者、ご家族、職員の理解、関係が深まり、とても有意義な話し合いができた。

（めいわ課長　中田　憲一郎）

□年度末ですが、沢山楽しみましょう！

今年は年度末ギリギリまで、沢山のレクリエーションや外出を楽しみました。
近隣のファミレスに行ったり室内でワイワイしたり、スーパーで各々が食べたい物を買って海まで行ったり。スーパーのタッチパネル式の清算が好評だったようです。
“来年度も、しっかり働き・しっかり楽しみます！”

（めいわ通所部所長　菊地　暁生）

□慰霊祭

２３日に、なのはな広場で慰霊祭が行われた。フォトフレームでの祭壇はすっきりして利用者がいつでもスライドショーで順番に笑顔を見せてくれている。ルミエールが開所して３０年になるが、退所された利用者は４０人を超えている。障害のある利用者は痛みや症状を訴えるのがとても難しく、職員も変化に気づくのが難しい。健康診断を受けて定期的に検査もしているが気づいた時には病状が進行しているケースが多くなっている。実際に治療を行うにも利用者の障害特性から治療が困難なケースもあり、これからは治療についてご家族と病院が密にコミュニケーションをとって進めていくことが求められる。入院してしまうと施設としてできることは限られてしまうが、施設として利用者のために何ができるか常に考えていきたい。

（ルミエール課長　原　宏之）

□弥生会

18 日　自治会行事として弥生会を行った。今年度は退職職員 4 名と異動職員 2 名を送ることになった。勤務の関係もあり。参加できたのは 3 名だったが、利用者が感謝を込め企画した会は心温まるものだった。エレクトーンクラブは「贈る言葉」「未来へ」「空を飛べるはず」「世界に一つだけの花」を演奏。涙をこらえきれずに上を向いて我慢する利用者の姿も見られた。「本当にお世話になったので」と声を詰まらせていた。職員からもこれまでの思い出を語り、これからの活躍を約束した。途中、サプライズで職員同士の結婚をお祝い。「羨ましい」「先をこされた」との声もあがり、笑顔もあふれていた。次のステップに進む職員の活躍を期待している。

（リホープ課長　稲垣　直子）

□一年間お疲れ様でした！

新しい年が明けて早３ヶ月、あっという間に年度末となった。新しい仲間が増え請負作業も順調にいただくことができ、以前のような“よもぎの園”に戻ってきたなと感じることができる一年であった。

この一年の締めくくりに会食会を開催した。第一部の昼食では「銀のさら」の海鮮丼を注文して皆で美味しくいただいた。指定管理受託時、銀のさらの箸セット作業を請け負っていたため、数人の利用者から「前にお仕事していたね」「２人前とか４人前のセットをしたね」等と懐かしむ声も聞かれた。

第二部では、ボランティアサークル“かぐや姫”の方々をお招きして、太鼓演奏、中国舞踊、手品等々披露していただいた。始まりの太鼓の音はお腹に響くほどの迫力で一気にその演奏に皆引き込まれていた。なかなか目にすることのない中国舞踊も「綺麗だった」と好印象であった。色々な演目を見ることができあっという間に時間は過ぎていった。

（佐倉市よもぎの園主任　近藤　真一）

□第 16 回　ふくしまつり　開催

3 月 16 日(土)に内郷地区社会福祉協議会主催の「第 16 回ふくしまつり」がミレニアムセンター佐倉で開催されました。新型コロナウイルス感染症の影響でここ数年は開催中止が続き、実に 4 年ぶりの開催となりました。「かけはし」からも職員 1 名がお手伝いに入り「カレー販売」を担当し多くの地域の方と交流を深めることができました。佐倉市社会福祉協議会が後援ということもあってくらしサポートセンター佐倉を利用されている方なども社協の職員と一緒に大勢お手伝いに入ってくれており、顔を見ると「かけはし」のケースの方だったりして思いもよらぬ共同作業となり普段の「相談」を通してだけでは築けない関係作りができたことは大変意義のあることだと感じました。

小さなことからコツコツと、地域に少しずつ種を撒き、根を張り、共に支え合う関係の輪に加えてもらえるよう取り組みを継続していきたいと改めて思いました。

（佐倉市よもぎの園管理者　戸室　輝大）

□かぶらぎ育ちの新入職員

2024 年度の愛光新入職員にはワークショップかぶらぎで学生バイトとして働いた経験のある青年が 2 名含まれている。主に作業活動において、それぞれ 1 年半～2 年のキャリアを積んできた。今月末で一旦かぶらぎを離れる彼らが利用者向けに残した別れのコメントを一部抜粋して紹介したい。

【A 氏】『約 2 年間皆さまと一緒に汗水流した作業の日々は、僕の人生における大切な「お守り」です。次に進む愛光の正職員の役割では、皆さんから学んだ優しさを色々な形で還元できるよう頑張ります。』

【B 氏】『かぶらぎで働く皆さんの、自らすべき仕事を把握し、自主的に取り組む姿勢から多くの事を学ばせていただきました。4 月からは愛光の職員として働くことになります。少しでも皆さんに近づけるよう頑張りたいと思います。』

週 1～2 回のシフトであったが、年単位で活動を共にする中で、彼らは単に“受注作業を手伝った”というレベルを超えた何かを掴んでいると感じる。今後の彼らの活躍をワークショップかぶらぎ一同、願ってやまない。

（ワークショップかぶらぎ管理者　近藤　美貴）

□防災訓練　～電話訓練～

今回は、外出中に被災することに備え、電話訓練を行うことにした。利用者の中には突発的な事への対応が苦手な方もいる。訓練前に説明をした様子では、内容を理解しているように伺えた。だが実際に訓練を開始すると、すぐに電話をかけることができない（使用方法、訓練の流れの理解が出来ていない等）状況であった。携帯電話を所持していても、日常で使用している頻度や内容に差が大きく、各利用者の使用についての確認や操作方法の簡易化（ワンタッチ設定）が必要であると感じた。携帯電話を持っていない方には、書面にて緊急時の連絡先、対応方法を持ってもらうなどの工夫が必要だと感じた。今回の訓練で電話対応が苦手であることが浮き彫りになった。訓練内容に関しても、「想定」をして行動することが難しい入居者もおり、利用者の理解度や状況に合わせて、訓練内容を調整する必要性を感じた。

より効果的な災害時対応訓練を実施できるように「電話訓練内容の見直し」、「携帯電話使用に関する支援」、「スムーズな電話連絡体制の構築」を図りたい。

（ジョーの家　髙橋　健）

□避難訓練

12 日　今年度 3 回目の避難訓練を行った。「地震発生後の火災発生」。いつも行っている設定ではあったが、今回は初めて消防士 3 名に立ち会っていただいての訓練となった。参加者に緊張感が出た所で訓練開始。実際に消防署への通報訓練も行った。当日は雨模様だった為、屋外への避難は出来なかったが訓練終了後に講評を貰い万が一に備える事が出来た。消防士からも「いつ災害が起こっても不思議ではない程、自然災害が多く起こっているので備える事は必要」との話もあった。

（山王の家管理者　岡本　綾子）

□モルック大会

３月２２日小学生対象のモルック大会を行った。モルックとは木の棒を投げてスキットル（木製のピン）を倒し、先に５０点ピッタリに得点を取ったチームの勝ちというゲームである。「１グループ３人まで」との条件で、自分たちでチーム決めを行った。スムーズに３人組になり、次々とチームが決まる中、最後まで決まらない５人組がいた。５年生３人と１年生２人のグループである。５年生と組みたい１年生たち。５年生も一緒に来ていた友達とチームを作りたい。どちらの気持ちもよくわかる。相談して分かれてもらうことも考えたが、今回は、「１年生 2 人でやってみるのはどう？」と提案をしてみた。モルックは学年関係なく優勝できる可能性があることを伝えると、「じゃあ、やってみる！」と 1 年生チームが結成された。そして、なんとこの 1 年生チームが優勝！！提案をしてみたものの、うまくできなかったら・・・との不安はあった。しかし、そんな不安を払拭する集中力を見せくれた。敗れた上級生たちは、悔しさは見せたものの表彰式ではおおきな拍手で讃えた。1 年生の恥ずかしそうな笑顔が印象に残ったモルック大会だった。

（南部児童センターインストラクター　吉田　知加子）

□うれしい言葉

寺崎、第二寺崎、山王、和田、根郷学童の常勤職員が新年度の準備のため、１か月早く３月での職員の異動となった。新たな場所で、新たな出会いに目まぐるしく１日が過ぎ、思うように動けず、子どもたちも『どんな人かな…』と、距離をとっているようで、それもまた焦ってしまうといった日々が続いていた。そんなある日、一緒に遊んでいた子どもたちから「明日も来る？」と、聞かれた。「明日も明後日もくるよ！」と、答えると「やった-！」との返答。まさにこの瞬間、子どもたちに受け入れてもらえたのだと感じた。どこへ異動しても私たちの仕事は変わらないはずであり、自分らしい保育をすればいいのだと肩の力がふっと抜けた。こんなにも「明日来る？」の言葉が嬉しかったことはない。子どもたちに「明日は何をしようかな！」「あの子と遊ぼう！」「あの職員さんと遊ぼう！」と、楽しみに来てもらえる様、この瞬間の気持ちを忘れずに新学期に向けて準備を進めていきたい。（寺崎学童）

（学童保育所主任　齊藤　理恵）

□教養教室発表会

南部地域福祉センターでは、市内在住で 60 歳以上の方を対象に教養教室を開催している。3 月 13 日（水）一年の成果をそれぞれ披露してもらうための、「教養教室発表会」が開催され、大広間の舞台にて順番に発表された。今回参加された教室は、大正琴、詩吟、太極拳、民謡、展示会部門は、書道、生け花である。

各教室とも凝った衣装や、迫力ある歌や発声での発表が見られたため、発表者もお客様もそれぞれが元気になれる時間であった。また、各教養教室の内容が見られたのは、来年度の参加者募集の良いきっかけづくりにもなったと思われる。

（南部地域福祉センター　青山　秀人）

□佐倉市全域でウェルシア移動販売開始！

佐倉市とウェルシア薬局が高齢者の生活支援や介護予防、地域のコミュニティづくりを目的とした協定書が締結され、３月１日より佐倉市全域でウェルシア薬局の移動販売事業が開始となった。販売場所については昨年の 11 月頃から、各包括の生活支援コーディネーターが動き始め、地域の民生委員や自治会長、地区社協等と連絡を取りながら選定を行った。南部圏域は 12 カ所。対象の地域からは「お店がないからありがたい」「買い物に来ると近所の人とおしゃべりもできる。週 1 回はおしゃべりの日だわ」という嬉しい声も。ある農村地区では、世帯数の半数が足を運んでくれた場所もある。目的どおりコミュニティづくりを実感した。

今回のウェルシアの移動販売は、地区の拠点を決めて、その場所に買いに行く必要がある。その場所まで行けない人が多いことも考える必要がある。包括も一緒にニーズを把握し、地域住民と主に移動販売を根付かせていく役割を担っていく必要があると考えている。

（総合相談センター所長　森　由美子）